# 講座① 大阪の今昔　-ことば・くらし・コミュニケーション-

| 第1講義 | 大阪のことばの歴史 |
|---|---|
| 大阪のことばといえば，「～や（雨や）」「～へん（食べへん）」「～はる（食べはる）」のような表現が思い浮かびます。しかし，これらはいずれも江戸時代後期から明治時代の間に現れ始めており，意外とその歴史は新しいものです。この時間では，主に江戸時代から明治時代にかけてで，大阪で使われたことばの様相を観察したいと思います。当時の大阪の社会状況と照らし合わせ，なぜこのような変化が起こったのかについて考えます。 | |

| 第2講義 | 大坂から大阪へ　都市のくらしと住まいのかたち |
|---|---|
| 大阪は豊臣秀吉によって城下町が開発された16世紀後期から経済都市として発展し、江戸時代には全国経済の拠点として「天下の台所」と呼ばれる巨大な商業都市として繁栄を極めた。近代以降は商業にくわえて工業が盛んになり、やがて人口、市域ともに東京を抜いて日本一となり、「大大阪」と呼ばれる時代を迎えます。大都市としての長い歴史のなかで、大阪には固有の居住システムと文化が形成されました。本講座では江戸時代と近代、それぞれの代表的な居住形態を取り上げて解説します。 | |

| 第3講義 | 話芸にみる大阪弁のコミュニケーションスタイル |
|---|---|
| 「大阪人が二人寄れば漫才になる」と言われることがあります。大阪弁の会話にはどのような特徴があり、その特徴はどのようにして培われてきたのでしょうか。この講義では、大阪弁のコミュニケーションスタイルの特徴とその成立過程について、昭和初期から現在までの漫才・落語といった話芸の中の会話のやりとりを観察することでみていきます。 | |

| 第4講義 | 大阪府方言の動向-地域差と世代差を軸に考える- |
|---|---|
| 大阪府方言の地理的分布を中心に府内でどういった地域差があるのか、大阪方言の地域差について取り上げる。前半では、元来、大阪府方言は、摂津・河内・和泉の3方言に分割されてきたが、この区画がどのように代わりつつあるか、探ってみたい。また、後半では、危機言語の視点から消滅しつつある大阪の伝統方言に触れ、方言変容の状況をこれまでの調査結果を示しながら、その実態を分析する。 | |

| 第5講義 | 大阪府方言と近畿諸方言との関連をさぐる |
|---|---|
| 大阪府の方言は、近隣の諸方言とも共通する部分が多いが、一方で対立するケースもみられる。代表的な例として、大阪方言と京都方言との対立は有名であり、これまでよく取り上げられてきた。この両方言の対立について具体的な方言事象を取り上げ、対立に至った状況を解説したい。また、河内方言と奈良方言、泉南方言と和歌山方言は、それぞれで共通する方言が多い。なぜこのような事態に至ったか、各々共通する方言事象を取り上げ、解説を行う。 | |

| 第6講義 | 現地講義：江戸時代にタイムスリップ　今昔館の町なみを歩く |
|---|---|
| 大阪くらしの今昔館の江戸時代のフロアは天保年間（1830～1833）の大坂・船場をモデルに実物大で町並みを復元し、光と音で朝・昼・晩の時間の変化も演出しています。まるでタイムスリップしたように、江戸時代の大坂の賑わいと暮らしを体感することができます。近代のフロアでは明治・大正・昭和の都市の近代化を精巧なジオラマで紹介。今回は開催中の万博記念の企画展示「大坂から大阪 住まいのか・た・ち」も観覧し、大阪の住まいと暮らしの歴史を様々な切り口から学んでいただきます。 | |